

月刊

いじろのとも

第七卷

四月号

叱られない

人間は

叱られなければ

人になれない

なのに

いま子どもは

権利として

叱られない

子どもの残酷化

子どもが

他者に

残酷になっている

精神の生命化

生命の物質化

物質の粗末化

その必然的結果

人生を考え直して

みたい人は(二二八)

『聖書』解説(四)

マタイ福音書の第五章を続けます。

六 義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。

この中で少し分りにくいのは、義という言葉です。キリスト教や儒教では大切な言葉ですが、一般にはあまり使いません。

キリスト教では、義とは神の正しさ、あるいは神の前の人の正しさを言いますが、でも、神の正しさというのも分りにくい言葉だと思います。もう少しなじみのある言葉ですと、義と正しさを合わせたものとして、正義というのがあります。こちらの方が一般的な言葉だと思います。神の正義、あるいは神の前の人の正義、と言えば少し分りやすくなったような気がします。

では、神の正義とは何なのでしょう。それは、神が完全さの標準に照らしてみてもそれに適合すること

です。キリスト教的に言いますと、神が絶対に罪がないこと、絶対に潔く、清いことを言います。そして、神の前の人の正義とは、この絶対な神を畏敬し、神の愛を信じ、神と同じように人を愛し、許すことを言います。

実は、この節と同じ内容の言葉が、ルカの福音書にもありますが、そこでは出だしの「義に」が無くて、「いま飢えている者は幸いです(第六章二一節)」となっています。

以前(二月号)にも、マタイでは「心の貧しき者は幸いです」となっているのが、ルカでは「心の」が抜けて「貧しい者は幸いです」となっていることをご紹介しました。そこでは、心があっても無くてもそう大して変わらなかったのですが、今回は義があるかないかで、かなり意味が違うように思えます。

私の推測ですが、おそらくマタイはやがて出てきます「一 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」という言葉に対応させて、この節に義を付け加えたのではないかと思うのです。その意図は、すべてのことを義に結び付けたのだと思うのです。それだけ義を大切にしていたということ。しかし、それは、もっと説明しないと分かりにくいと思いますが、ある意味で律法を重視する考え方

だと言えるのです。

少々、理屈っぽい話で恐縮なのですが、この節の本質的規定に関しますので、辛抱して読んで頂きたいと思えます。復習と予習を兼ねて、本章の出だしの八つの節をあげてみたいと思います。

三 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

四 悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。

五 柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。

六 義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ちたりるからです。

七 あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けからず。

八 心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからず。

九 平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。

一 義のために迫害されている者は幸いです。天の

御国はその人のものだからです。

この前半の四つと後半の四つを読み比べて頂きたいと思えます。どんな人が幸いなのかに注目しますと、前半は、貧しい者、悲しむ者、(何の力もない) 柔和な者、飢え渴いている者、ですが、後半は、あわれみ深い者、心のきよい者、平和をつくる者、義のために迫害されている者、です。

両群の違いは、お分かりでしょうか。

何度も読み返して頂きたいのですが、私の「精神モデル」で言いますと、前半は「自己」の追求の弱い人のことを言っていますが、後半は「他己」の働きの強い人のこと、少なくとも自己と他己の統合のとれた人のことを言っていることが分かります。

後半については、今後順次、検討・解説しますので、これ以上の説明はその時点で行いたいと思えます。

前半の三つは既に解説しましたので、そこをご覧いただければ、納得できることと思えます。

前半の最後が、いま検討しているものですが、後半の四つ、特にその最後の「義のために迫害されている者」と対比してみれば分かりますが、義といえますのは、既に見ましたように、絶対で完全な標準に合うということ

ですから、それは他己のことを言っているのです。

ということとは、義を欠いたルカの「いま飢えている者は幸いです」の方が、この節を自己を追求しない項目群に入れることができ、整合性が高いように思えるのです。義を持ち出すのは、後半最後の「義のために迫害されている者」だけで十分だと思えるのです。

さて、八つの節の構造的な検討はこのぐらいにして、義を取り去った、第六節の言葉自体を検討しておきたいと思えます。

本節の「飢え渴く」と言いますのは、自己の欲望が満足できない状態を言います。それは、この前の三つと同様に、自己を追求しない、あるいは追求できないことを示しています。人間は、自己の欲望が満足できないほど、また自己の感覚・運動が自由にならないほど、さらに自己の認知・言語能力が高くないほど、自己に執らわれを持つことが少ないのです。人間としての驕慢さ、傲慢さから解放されているのです。

大学の先生は、自分は学問をして頭がよいと思っている人が圧倒的に多いのですが、その中でも、いわゆる有名な大学の難しい学部を卒業し、語学が何か国語ができたり、よい業績を上げたとか、何か賞を貰ったりした人ほど、自己への執らわれが多くて、現実に間違いや悪を

たくさんなしています。でも、それが悪や間違いだと気付くことができません。それは、仏や神の道からますます遠ざかって行っていることを意味していますが、でも、それに気付けないのです。ですから、平気で間違ったことを主張するのです。悲しいかなです。

これまで見てきました、貧しく、悲しく、力なく、飢えているような、自己の追求のできていない、あるいはしていない人たちは、執らわれがそれだけ少ないと言えますので、その分、仏や神に近いと言えるのです。

最後に、本節の後半の「その人は満ち足りるからです」という部分ですが、これは、これまでと同様に、飢え渴いた人が、単に食物や水分でその飢えや渴きを生理的に満たすことを行っているわけではありません。なぜなら、単に飢え渴いて、その飢えや渴きを満たすだけなら、それは幸いとは言えないからです。そんなことなら、飢えや渴きを経験しない方がましだと言えます。

ですから、そうした経験が幸いと言えるには、その人の人生にとってプラスになるものがなければなりません。飢え渴かない人よりもっと人生に生産的な働きがなければなりません。

それはどんなことなのでしょう。いま、世界には飢え死にしている国もあります。でも日本は飽食暖衣で、

飢えや渴きは無縁の世界になっていきます。ですから、このことを考えることは、とても意味があることだと言えるのです。

三節から五節までをよく読んで頂いた方には、もう解答はお分かりだと思えます。

人間は生まれたての赤ん坊の時とても無力で、何もたず、放置されればただ飢え渴き、凍えて、悲しくも死ぬしか方法がありません。そうした無力な状態から人間として進化したとき与えられた無類の可塑性を生かし、成長につれて文化・文明を取り入れ、だんだんと自分ではいろいろなことができるようになるのですが、そのために人間は、誕生と同時に他者に対し無条件に積極的な関心に向け、あらゆる人間を受容し、あるがままにあるように造られています。そうすることによってのみ、人間は人間として精神的に健康に育つことができるのです。

キリストだけではなく、釈尊も老子も、人間が解脱に至るには、このような赤ん坊のようにならなければならぬと説いています。

それは、いま述べましたように、力なく、当然ながら貧乏で何もたず、放置されれば、飢え渴き、死ぬだけの悲しい存在としての赤ん坊に帰るとき、私たちは他者、特に絶対他者（神や仏など）に対して、敬虔な気持をも

ち、無条件に積極的な関心に向け、あらゆる人間を受容し、あるがままにあることができる、ということの意味しているのです。

いま日本人は、経済的な豊かさの中で、貧乏や飢え渴きが無縁の世界となり、国際的にも経済的・政治的力を得、放置されれば死ぬというような悲しい存在ではなくなつて来ています。しかし、逆に見ますと、こうして

「自己」を肥大させて来ますと、他者の痛みは、アメリカ大統領の日本への原爆投下正当化発言のように、分かんなくなつてくるのです。そして、他者が自分を支え、承認し、愛し、服従してくれることだけが大切になるのです。それが得られないとき、ニヒリズムに陥るか、フアツシヨにはしるかするのです。

こうしたことは、神や仏の世界からは、どれだけ遠ざかっているか分からないほどです。いま、オウム真理教をはじめとして新宗教が花盛りです。でも、私から見ますと伝統的宗教を含めて繁盛している宗教指導者の大多数は、ただ能才なだけで、真の宗教、真の解脱からはほど遠いと思えます。自分では解脱したと言っていますが、オウム真理教のように、ただ、「自己」を守り、拡張するために言うにすぎません。

キリストの言葉を謙虚に受け止めねばなりません。

自作詩短歌等選

自己肥大した現代人

自分の痛みは
感じるのに
他人の痛みを
感じられない人

自分の要求は
受け入れさせるのに
他人の要求を
受け入れられない人

お大師と感応道交

お大師と
共に暮らせし
夢を見る
我と大師と
感応道交

虚無主義か独裁か

この世から
神も仏も
無くなつて
信じるものは
自分だけ
虚無主義を生み
独裁を生む

土の匂い

久しぶり
畑を借りて
耕せり
土の匂いの
懐かしきかな

徒党組みけり

執らわれの
垢の付き方
合うものが
互いに共感
徒党組みけり

子どもの人権

大人のところが
亡んで
子どもの人権が
興きる

新たな病気の誕生

エイズ
エボラ出血熱
狂牛病

たとえ
ガンが克服できても
それを上回る
あらたな
病気が
つぎつぎと
生まれる

自作随筆選

喫煙健康被害訴訟

アメリカでは、喫煙で健康を害したのは、たばこメーカーが喫煙者をつなぎとめるためニコチンの中毒性を隠し含有量を操作してきたためだとして、健康被害の損害賠償を求める訴訟がおこっている、といいます。テレビニュースでそれを聞き、新聞で確かめて驚きました。

いまや喫煙が、喫煙当事者だけではなく、大気を汚染させ、周囲の人々の健康をも害していることは、科学的に証明された事実として、誰でも知っています。

驚いたと言いますのは、有害な煙草を吸うほうが悪いと私などは考えるのですが、権利の国・アメリカでは、自分のことは棚に上げて、煙草を売るほうが悪いと訴えるというその考え方に驚いたのです。

でも、考えてみますと、何ら益がなく健康に有害でしかないものを作って売っているということは、とてもおかしいことだと思えてきました。やっぱり吸うほうも悪ければ、作るほうも悪いということになるのだと思います。ただ、誰もたばこを買わなければ売れませんから、

たばこ会社はつぶれてしまうのですが、そうしたただかたばこを吸わないようにすることでさえも、人間は自分で制することは難しいものです。悲しいかな、たばこに限らず、理屈で自分を律することはとても難しいことなのです。

シートベルトも、喫煙と事情がよく似ています。シートベルトをしないことは、喫煙とは違って他者には何も迷惑をかけませんが、自分自身を守るためにだけ、法律でそれをするように強制しています。

シートベルトと違う点は、たばこが周囲の人にまで迷惑をかけているのに、法律で禁止することができないということなのです。それは、禁止しても守れないことが明らかだということもあるでしょうが、たばこ産業に従事する人の生活を政府が保証しなければならぬということもあるのでしょうか。なにせ、アメリカでは、喫煙どころか、麻薬や覚醒剤の禁止さえ、法律によってはなかなか守られず、違反者の服役所で刑務所はあふれ、収容能力の一五〇％に達しているといえますので。

自己のエゴを権利として主張する風潮には、強い懸念を感じますが、たばこがなくなることを願って、たばこ会社が窮地に陥るような判決を期待したいと思います。（なお先日、日本でも同じ訴訟がおこりました。）

釈尊のことば（四五）

法句經解説

（一六四）愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従って生きる真人・聖人たちの教えを罵るならば、その人には悪い報いが熟する。カッタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうように。

いま、仏弟子である僧侶でも、釈尊を批判し「のしる」ようなことを平気で書いています。また、僧侶の中にはそれを読んで「愚かにも、悪い見解」を本当だと思い、「悪い報いが熟する」とも気付かず、それを人に吹聴さえしている人もいます。

この偈を読みますと、このことを思い出すのです。この偈にありますように、釈尊が自らそうしてはならないと説かれているのに、なぜ、そんなことが起こるのでしょうか。

その原因は、現代が末法の世になり、人々が各自で自分が偉いと思うようになったからなのです。教育が行き届き、みんな賢くなり、経済的にも豊かになりました。その結果、みんな自己を肥大化させ、自己に閉じていま

す。そして、それに反比例してお互いの「信」が失われてきているのです。

日本の大多数の仏教徒・僧侶は、釈尊を心から信じて帰依するのではなく、仏教を自己の生業としています。自己の生計の手段としてしているのです。釈尊は、生業を捨てて出家することを教えられているのですが。

では、信じるとはどんなことなのでしょう。そのことと自己を肥大化させ、自己に閉じこもることとは、どんな関係があるのでしょうか。現代人はなぜ信じられなくなってきたのでしょうか。

突然ですが、皆さんは、納得できないことでも、信じたり行ったりすることができませんでしょうか。

いま、多くの人が学校教育によって近代的合理主義の洗礼を受け、何ごともあたまで考えてみる習慣を身につけています。五、六十年前なら、昔からの「迷信」や封建的なしきたりを排除することが、現代人の現代人たるゆえんのように言われ、科学的でないことを信じたり、行ったりしますと、変わった人、あるいは、もつと言いますとあたまのおかしい人と言われました。

でもいまでは、迷信を信じるといふようなことは話題にすらなくなりましたし、封建的だと思えることもほとんどなくなりましたが、実はそれだけ、疑いもなく、

自分のあたままで考えて納得できないことは信じなくなつてしまつていえるのです。

しかし、問題なのは、あたままで考えて分かつたり、納得できることだけしていたら、あらゆる人の人権が保証されみんな幸せになるのか、お互いの平和が来るのか、あるいは、間違いや悪をなさず、善をなすことができるのか、あるいは、毎日充実した人生を送り、生き甲斐を感じることもできるのかということなのです。

私から見ますと、そんなことはない、と言わざるをえません。

それとは逆に、あたまで納得できることだけ信じていますと、人間はお互いがだんだん信じられなくなつていくのです。この偈にありますように「真理に従つて生きる真人・聖人たちの教え」を、現在僧侶がそうなつていきますように、信じることができなくなるのです。

なぜかお分かりでしょうか。

実は、これを説明しましても、なかなか理解して頂けないことで、これは、それこそ信じて頂かなければならない部分に属することなのです。

それは、釈尊の真の心が、大多数の人のあたままでの理解を超えていることだからなのです。老子でいえば「為さずして、為さざること無し」という境地なのですが、

それが分かる人が滅多にいないからなのです。生死でいますと、いつ死んでも、心から満足して死ぬことができる、そういう心境だと言つてもよいと思いますが、そう思える人も滅多にいません。

そうした境地に至るとき、前述のように、悪をなさず、善をなすことができますし、毎日充実して生き甲斐を感じることもできるのですが、しかし、大多数の人はそれができません。ですから、そうした境地に至つた人の価値も分からないのです。せいぜい過去の偉い人たちが言うから、あたまでそうなのだと思うだけなのです。

そうなりますと、自分のあたまの水準に引き落としてそうした人も理解する以外にありません。自己の水準を超えたものを理解することはできないのです。ということは、それが人だけではないということです。私たちが超え、私たちに存在を贈っている神や仏も信じる事ができないということでもあるのです。

この世のすべてのことをあたまだけで理解し、納得しようとする現代の傾向を近代的合理主義と呼んでいます。そこでは、結局、釈尊も老子もソクラテスもキリストも本当は分からないのです。では、どうすれば分かるようになるのでしょうか。

そのためには、もう何度も書いてきましたように、修

行がいます。自己への執着をすてる修行がいます。人は、いくらあたまで考えても現実の生活を自らコントロールすることはできないのです。

たとえば、人間は誰でも、必ず死ぬ、それもいつか分からないとき、つまり若くして死ぬか、長生きして死ぬか知らないで、死んでいくのですが、でも、他人がそうして死んで行くのは当たり前でも、自分や自分の愛する家族が、たとえば若くして死ぬと分かりますと、どんなに悲嘆にくれるか、わからないほどです。

それは自分への執着があるからです。

また、「人類みな兄弟」というキャッチフレーズがテレビのCMで流されたことがありましたが、本当にそう思えるなら、事実上の親子兄弟にこだわって、会いたがったり、話をしたがったりする必要はないわけです。でも、CMを流した人を含めて、みんな自分のふるさとを恋しがりますし、家族の絆を熱心に求めます。いわんやそれを捨て去ることなど思いもつかないことです。それは、たとえば、一旦はふるさとと家族を捨てて出家した、あの良寛さんでさえ、修行した岡山を離れ、晩年は故郷の新潟に帰って、地元の有力者の庇護を受けながら暮らしたのをみても分かります。

人間は自分があたまで納得して、自己への執着を捨て

去ることはできません。そのためには、自己を捨てる修行がいます。その修行の結果、自己を捨てられたとき、自分の存在を贈ってくれた者と一体となり、全てをその者におまかせすることができるのです。そして、真の自由と真の平安と真の自己コントロールを得ることができるのです。偈にありますように、自分自身が「真理に従って生きる真人・聖人」となることができます。しかし、繰り返しになりますが、そうした境地は、あたまで理解できるものではありません。ただ、信じる以外にないものなのです。そして、その人のいうことにつとめて、たとえその通りできなくても、毎日、反省しながら、そうなるうとひたすら努力・精進することが大切なのです。しかし、これは、近代的合理主義と個人主義の行き着いた現代人には、僧侶を含めて、とても難しいことなのです。

ということとは、このまま社会が進みますと、偈の通り「悪い報いが熟し」、自らの為した業によって、「自身が減びてしまふ」、つまり、現代社会全体が滅亡に至るといふことだと思ふのです。その時期は、もうかなり近くまで来ているように、私には思えます。

一人でも多くの人が、釈尊、老子、ソクラテス、キリストの教えにのっとって生きることを祈っています。

(一六五) みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから浄(きよ)まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることができない。

この偈に近いことわざとして、自業自得、因果応報、といったものがあり、皆さんも聞かれたことがあると思います。でも、大切なのは、その次の「浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることができない。」というところです。

英語のことわざにも「天は自ら助くるものを助く」と言っています。同じ趣旨だと思えます。

でも、何かこれを読みますと、先ほどの偈で述べました個人主義のことを言っているように受け取られるかも知れませんが、そうではありません。

人間の主体性のこと言っているのです。

真言密教でも、病氣平癒の祈祷がありますが、お大師さんもおっしゃっていますように、その効果は本人が祈祷する人を信じ、自分も同じように治るよう祈らなければ現れません。一見、他者によって治されているようですが、主体的な努力がなければだめなのです。

自分の人生は自分自身のものです。たった一度のかけがえのない一生を、それぞれが、どんな人間であろうと、個別な業をもつて生きています。その生は、どんなに世間によくある典型的なものであっても、その典型という客観の中には解消できないものなのです。もし解消できるものなら、自分が死のうが、身内が死のうが、平然としておられるはずですが、そんなことはできません。

ということは、自分の為す行為、為した行為は他者と取り替えることが不可能だということです。自分の悪はどこまでも自分の悪としてはね返ってきますし、自分の為した善は何らかのかたちで自分にはね返ってきます。例えば、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒(酒に飲まれない、あるいは酔うほど飲まない)の戒律を守って自分自身の身を浄(きよ)め、自分の精神の完成を願って、ひたすら修行に精進するとき、自らの精神全体を浄めることができるのです。

どんなにお金があるうとも、どんなに地位・名誉があるうとも、その行為は決して他者で代えることはできないのです。

自らの魂が救われる道は、自分の人生を自分が自分の足を使って自分で歩く以外にないのです。

後記

- 一、桜の花も咲き、良い季節になりました。四月八日はお釈迦さまの誕生日です。
- 二、最近、散歩の途中、休耕中の畑のげしに石仏を見つけ、近寄って調べたところ、それがお坊さんのお墓であることが分かりました。正面に「大阿闍梨法印 増観」とあり、年号は安永八年（一七七九年）とありました。
- 三、この「大阿闍梨法印」という僧階（僧侶の位）は、当時として最高位で、大変な高僧ということでした。
- 四、その墓は、もう何年もお参りがないようで、花立ても片方は割れており、供物受けも欠けて半分しかありませんでした。また、墓と並んで灯籠があるのですが、火受けもなく上に乗せる石もありませんでした。
- 五、因縁を感じ、さっそく地主の方のご許可を頂き、掃除をさせていただきました。そして、線香、灯明、お花を備え、お経を唱えさせて頂きました。
- 六、なぜ、こんなところに、こんな高僧のお墓があるのか、不思議に思い、地元のお寺で聞いたり、地元史をひもといたり、地主の人に聞いたりして、やっと事実を突き止めました。それは、明治のはじめの廃仏毀釈でおとりつぶしにあった寺のご住職の墓だったのです。その廃寺の他のご住職のお墓も、ある浄土宗のお寺の裏山（そ

の寺の所有地）で見つかりました。最近是谁のお参りもなく、荒れ果てて、一五〇六基残っていました。

七、なぜ、「増観」さんの墓だけが、そんな畑のげしにあるのかといえますと、その畑の下に広がる田んぼを新田開発し、遺言でその田んぼが見渡せるところに葬って欲しいということ、そこになったそうです。

八、石仏の位置ですが、その向きは、仲間の墓地のある裏山を丁度向いており、また、それは東の方位で、この地に虚空蔵菩薩信仰があつたことから、虚空蔵求聞持法を修する時の瞑想の対象たる虚空蔵菩薩の化身の金星の方を向いているのではないかと予測しています。

月刊 こころのとも 第七巻 四月号 （通巻 七十六号）	平成八年四月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（じょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	